午後の微笑

曽野綾子

文春文庫

定価はカバーに表示してあります

の微笑　133－2

11月25日　第1刷

曽野綾子
樫原雅春
株式会社文藝春秋
千代田区紀尾井町3　〒102
03・265・1211

乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

Printed in Japan

文春文庫

午後の微笑

曽野綾子

午後の微笑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

郵便配達

初秋の午前の陽ざしが、葉のおちた梢から、やわらかい木もれ陽になって降りそそいでいる住宅地の中の道を、郵便配達が自転車を押して歩いている。

かなり年とった気むずかしい顔をした男である。

それは生まれつきの表情なのか、この頃のようにろくでもないダイレクト・メールのたぐいがふえて、そのしわよせが、自分のさげているカバンにかかって来ることに対する不満のためかわからない。

彼は今、「四軒長屋」の角にさしかかっていた。

四軒長屋というのは英語ぎらいの彼の自分勝手な呼び方である。本当はテラス・ハウスというのだ。事実、小さな花壇や、白いペンキ塗りの西洋風の物干場など、どうみてもしゃれていて、長屋という感じではない。

テラス・ハウスの一軒目は老夫婦である。郵便物もあまり多くはない。

二軒目はやたらに薬の見本が送られて来る家であった。どこか製薬会社の関係のあるうちか。それとも病院へでも勤めているのか。

三軒目のポストに郵便物をほうりこもうとして、男は目の前に小さな手がさし出されているのに気がついた。

「おじさん、郵便なら、私が持って行く」
縄とびの縄を背中にひっかけた小学校二年生くらいのかしこそうな女の子である。
しかし彼はそんなことで、顔の表情を弛めたりはしなかった。
「前田さんかね」
彼は確かめた。
「そうです」
彼はちょいちょいと指先を器用に働かせて、ポストにほうりこもうとしていた五六通の封筒の上書きを見直してから、女の子に渡した。渡し終ってから、しかしちょっと変な予感がして、彼はテラス・ハウスの最後の家に配達すべき分を確かめた。
頭がぼけるどころか、実にまだ自分の記憶はしっかりしていると彼は満足した。
前田あてに確かに白い封筒があったと思ったのに、今女の子に渡した中にはそれがなかった。
おかしいと思って隣家の分を捜したら、果してその中にまぎれこんでいたのだ。
「まだあった」
彼は女の子にそう言いながら、その白い封筒を渡した。
かっこうといい、重さといい、明らかに結婚の招待状であった。
女の子に手渡した時、封筒の裏に印刷された差出人の名前が、いやでも目についた。もっともその中で彼の記憶に残ったのはたった一カ所だけである。
「密石つや子」

連名のうち後の方に印刷されているところを見ると嫁さん側のおっ母さんの名前でもあるのだろうか。

密石つや子、おかしな名だ、と彼は思った。

女の子が、家の中に走りこみながら、

「ママア、郵便！」

とどなっている声が聞えた。

その間に郵便配達の男は、自転車を押して、長屋の最後の家の方に歩きながら、今し方、前田という家に渡したのと同じ手ざわりと重さの結婚招待状が、まだほかにも二三通あったように思った。

恐らく同じ差出人にちがいない。このあたりに知人がかたまっているのだな、と彼は思った。

もちろん、それは大した意味をもつものではなかった。結婚シーズンはこれからである。あいかわらず性こりもなく、男と女が一緒になるものだわい、と彼は考えている。

彼がそうして受持区域を歩いているうちに、前田家では、リビング・キチンの掃除をしていた前田夫人が、娘から郵便物を受けとった。

今日は日曜日であった。

夫は今しがた起きて来て、食卓の上をパンくずだらけにして、トーストとインスタントコーヒーと半熟卵のおそい朝食をすませると、サンルーム代りの廊下の籐椅子にひきあげて、あごひげをぬきぬき、新聞を読んでいるところであった。

前田夫人が、最後に結婚の招待状を見つけた時、或る興奮がその表情に現れた。

たまたまリビング・キチンにいて手許に適当な鋏がなかったからという事もあるかも知れないが、彼女は家庭内において何事にもかなり行き届いたことの好きな妻の行動としては、いささかはしたないと思われるほどの勢いで、その封をばりっと引きさいた。

「パパ！」

彼女は招待状の文面に目を落したまま、廊下の夫を呼んだ。

夫は返事をしたが、それはスポーツ欄の野球の記事に気をとられている時だったので、「う」とも「あ」ともつかぬ、いいかげんな答えであった。

「あなた！」

「何だ？」

「呼んでるのに！」

「――――」

「密石麗華が結婚するのよ」

（結婚か、結婚ぐらい誰だってするだろうよ）

少くとも前田義雄にとっては、十年前、今の夫人と一緒になった時から結婚の神秘性は失われている。

しかしそれと同時に、前田義雄は、結婚のベテランにはなっていた。つまり、なまなかのことでは、妻にさからわない、という処世術を覚えたのである。

「密石というと――」
彼は思い出そうとしているふりをしてみたが、実は時間を稼いでいるにすぎなかった。
「私のクラスの密石さんよ」
妻はそういうことは当然夫が知っているべきことのように言うのだった。
「ああ、思い出した。売れ残っていた人だろう」
これから結婚するというのだから、売れ残っていたのは当り前のことだ。
しかし、幸いにも、このはなはだ気のない科白のもつおかしさは、それを口にした本人にも、その妻にも自覚されないですんだ。
「売れ残りとはいうけど、世界の七不思議みたいな売れ残りだったの」
「そんなにきれいかい」
前田氏は初めて新聞から顔をあげて尋ねた。
「誰と結婚するんだい」
それは、妻に対する純粋にサービスのための質問だと彼は思った。
「これみて！　ここに名前が書いてあるけど、何だかきいたことがある名前だわ」
夫は金縁の招待状を鼻の先につきつけられた。
「熊井か、これは大臣をしてた男じゃないか。文部大臣だったか、厚生大臣だったか、いやたしか文相だ」
「それはお仲人さんでしょう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

前田は別にさぼっている訳ではなかった。書類に目を通す時、最初から、手をぬかずにたしかめていくということは、慎重な銀行員らしいやり方なのであった。

それから初めて、彼は新郎の父親の名前にたどりついた。

「国分宗重。これは君、例の東部工機の会長じゃないか。社長は最近その長男か何かがなった筈だけど」

「へえ、そうすると、この宗男さんというお婿さんは会長の次男なのね」

「次男という人は直接には知らないけれど、いずれ、専務取締役か何かだろう」

「へえ、そうなの」

「これは悪くない縁組だね。これ以上、大きな会社になると、創始者だろうが何だろうが、とうてい自分の自由にはならないけど、同族が株の大半を握っていて、ひょっとすると息子に社長のお鉢がまわってくるというところじゃ、このへんが限度だな」

「そう」

この短い返答の中には、無限の女の思いがこめられているように前田は思った。

男は正直なのか、策がないのか、このような陰湿な表現はとらない。

「でも麗華も、とうとう自分を高く売りつけたのね。三十近くまでえり好みをしていたら、却ってろくな運はつかまないって言うでしょう？」

イソップ物語じゃあるまいし、と前田は思ったが、それを口に出しはしなかった。

「三十近くなってもきれいかな」

前田はやや疑わしそうに言った。
「そりゃあ、ますますみがきがかかって来たっていう感じよ」
妻は保証した。
「あなたは、よく料亭やバーなんかで、ちょっといい女の子がいるなんて言っていらっしゃるけど」
「それはまあ、友達の前なんかではそういうものなんだ」
前田は一応弁解した。
「そういうところには確かに流行のメークアップをうまくとり入れてるような女性がいると思うの。でも麗華と比べてごらんなさい。品がちがうわ。今時、品がいいとかわるいとか、少し古めかしい言い方でしょうけどね」
「いやあ、そんなことはない」
前田は煙草に火をつけてから何気なく言った。
「君は、彼女の崇拝者だな」
「崇拝者だなんて、まさか」
妻に言われて、前田は自分の失言を感じた。
「別に崇拝してみたってしかたがないじゃないの。只、女の人って、えてして同性にやきもちをやくものじゃない？　美人に対するほどこっぴどいのよ。だけど私、麗華のよさだけは、正当に評価しなきゃいけないと思ってたの」

「大学時代に、君とはそんなに仲がよかったのか？」
「まあね。あの人、親友ってのは或る意味でないのかも知れないの。何しろ、学校の頃だって、日本語がよくできなかったでしょう。ふつうの話には不自由しないけど、文学になったら駄目だし、殊に困ってたのは憲法の講義よ。ノートは私が必ず貸してあげてたの」
「君のノートはきれいだからいいな」
それは別にほめたのでもけなしたのでもない、最も無感動な相槌のうち方であった。
「しかしレイカ、レイカってきかされると、どうしても、あのソ連の犬を思い出すね。ライカ犬っていったっけ？」
「麗華のパパが上海の支店にいた時に生まれたのよ」
「おやじさんは銀行だったかな？」
前田はあてずっぽうを言った。
「ううん、商事会社でしょう。あそこのうちは、子供が生まれた国の女の名前をそのままつける習慣があるのね。麗華のすぐ下の亡くなった妹が里砂ですって。これはアメリカ生まれだわ。一番下の妹が織香よ」
「ふうん」
「これはベルリンだったと思うな」
「オリガなんていうドイツ名前あるかな」
「ベルリン時代に白系ロシア人の女中さんがいて、実によく面倒をみてくれたんですって。織香

というのはその人の名前をとったらしいわ。本当はオルガなのかしら」
前田が知っているロシヤ語に関する知識といったら、ウォツカとか、タワリシチとか、トーチカとかおよそろくでもないものばかりだったので、彼は妻の話を、訂正する力も肯定する力もなかった。
「麗華姉妹くらい性格のちがうのはいないわね」
「ふうん」
「織香の方は苦労人っていう感じなのよ。幼稚園に勤めててね。安月給で一生懸命、子供の世話してるのよ。それを又麗華のほうときたら——」
そこで突然、前田夫人は言葉を切り、庭の子供に向って叫んだ。
「ミホちゃん、いけませんよ。そこで縄とびしたら、バラの木を折るじゃないの」
夫はちょっと首をもたげたが、事はバラの木の危機に関することだとなると、又椅子の背に頭をもたれかけた。
「何を話してたっけ」
妻はちょっとひとりごとを言ってから続けた。
「ああ、織香のことをね。麗華ったら、《妹は心のきれいな娘よ》ってすごく自慢してるのよ。だけどその口の下から御当人は、自分の結婚のことについて何といってたと思って？」
「さあ」
「《私に今欠けているのはお金だけなの。だから、私、お金持と結婚しますわ》」

妻はその言葉にちょっと英語風のアクセントをつけて真似をしてみせた。
「大したバカ自信じゃないか」
「でもそう言っておかしくないような人だしね。たとえそうでなくても、こっちがあきれるほど正直で見事だと思うわ」

その頃郵便配達の男は、密石つや子という差出人の名前の印刷された二通目の結婚通知を、一軒の古い西洋風の家にほうりこんでいた。

勿論、今度は国分宗重の名前の方も目に入ったが、彼は男名前などには何の感興も覚えなかった。密石つや子という名前がいいのだ、と彼は思った。芸者のようなイキな女の名前だ。

郵便物がほうりこまれたのは、木津竜平邸である。このうちには、夜、速達を届けに行くと、何カ月かに一度、門の前にタンクのような高級車がずらりと並んでいることがある。実業家という奴なんだな、と彼は思った。仲間の噂によると、五井商事のおえらどころだ、という話だった。

しかし考えてみると、実業家というのは変な呼び方だ。実業家というのは、我々のように、額に汗して働いているものに対する呼び方だ。会社の役員などというのは、虚業家ではないか。

しかし、木津夫人は美人だ、と彼は連想した。名前は確か、都といったと思う。彼は一度、やはり夜おそくなってから速達を届けに行き、豪華なじゅうたんを敷きつめた玄関先の、凝った照明の下で、近々と木津夫人の顔を見たことがあった。

中肉中背の、立体的な顔と体をした女だ。年の頃は三十五ぐらいだろうか。唇のそばにほくろ

があった。それがたまらなかった。こちらまでが、なぜか舌なめずりをしたいような気持になって来る。客のいる気配はないのに、黒いセーターの襟に小さな光るブローチをつけていた。

夜の粧いという感じだった。その何気なくつけられたブローチの冷たい光が、均勢のとれた胸の隆起を強調している。彼は映画をみているような気がした。よそ行きでもないのに、そんなにものぎれいによそおっている女の生活が、彼にはどうも納得いかなかったのだ。

そんなことを思いながら彼が門の脇にとめてある自転車を押し始めた時、玄関のドアが開く音がしたが、彼は後をふりむいてみなかった。

それは、やはり、大柄なチェックのスカートとおそろいのストールを肩にまとった木津夫人が、門のところまで郵便をとりに現れたのであった。

デパートの特別御案内や青い航空便の封筒にまじって、白い結婚通知の封筒を見つけると、彼女はしなやかな指先でくるりとそれを裏返して差出人の名前を見た。

一瞬彼女は足をとめたが、それはほんの一瞬であった。彼女はそのままゆっくりと家の中に入り、食堂のテーブルで、ガウンを着たままの夫と、赤いセーターを着た高校一年の一人息子が食事をしているその席に何気なく坐った。

「竜二は今日はどうするのかね」

木津氏は息子に尋ねた。

「御飯たべたら、藤沢へ行くつもりなんだ」

「又行くの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor